

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩 ベストセレクション」

会期：開催中～12月13日（日）まで

「小川原脩 アジアの大地」

70歳を目前に、中国・桂林を訪れた小川原脩。そこで出会った風物に目を見張り、創作の新天地をひらきます。中国、チベット、インドへのアジアの旅は、開拓間もない頃の故郷・倶知安の姿と重なり、作品を生み出しました。

会期：12月19日（土）～平成28年4月17日（日）

■企画展示

「竹岡羊子展 カーニバルに魅せられて」

会期：開催中～12月13日（日）まで

「小川原脩のまなざし＜顔＞」

小川原脩が描いた、いろんな「顔」を見てみましょう！誰かによく似ていませんか…？

会期：12月19日（土）～平成28年2月14日（日）

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

エコール・ド・パリ物語④「素晴らしき乳白色の肌！藤田嗣治」

日時：12月19日（土）14時～15時

講師：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

※企画展「小川原脩のまなざし＜顔＞」オープンと併せて、作品の見どころ解説もあります！



**クリスマス
キッズ・コンサート**

12月23日（水・祝）17時30分～19時30分
合唱、ハンドベルなど、子どもたちが聖夜に贈る楽しいひととき！

会場：当館第1展示室 料金：無料

素敵なメロディに酔いしれてーカーニバルの宴ー

11月8日（日）、小川原脩記念美術館でロビー・コンサート「カーニバルの宴」が開催されました。

テノール歌手の佐藤貢さんを中心に結成されたコンセール・アミによって演奏されたのは、開催中の竹岡羊子展のテーマであるカーニバルにちなんだ数々の楽曲。

集まった48名はフニクリ・フリクラや、シューベルト作曲の魔王など、バラエティーに富んだ迫力のある演奏と歌唱に耳を傾けました。



▲アンコールに応えるコンセール・アミ



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分）

12月の休館日

1日、8日、14～18日※展示替え休館、

22日、29日

31日～1月5日※年末年始休館

美術館長から

展示室を巡回するたびに思っています。この、ほとばしるような情熱はどこからくるのだろうか、と。竹岡羊子さん、カーニバルをテーマにしてほぼ半世紀、フランスやイタリア、スペイン、スイス、さらにはカリブ海にまで足を延ばして取材してきました。その原点は生まれ故郷、九州太宰府のお祭りにあると言います。きっと、住民の熱い思いを載せたお祭りやカーニバルは、竹岡さんにとって世界中の人々とつながる窓口なのでしょう。小川原脩は、後輩であり、仲間であり、友人である、そんな竹岡さんの情熱的な姿を、温かく見守っていたそうです。展覧会は13日まで。お見逃しなく。

館長 柴 勤

海と山と田園とーミュージアムロード情報ー

【クローズアップ】

西村計雄記念美術館

「ふるさとの魅力、再発見」

Discover Japan, Discover Shiribeshi、西村計雄、山岸正巳、前川茂利、3人の作品を展示。

会期：開催中～2月21日（日）

■西村計雄記念美術館 ☎ 0135-71-2525

■木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

■荒井記念美術館 ☎ 0135-63-1111

■有島記念館 ☎ 0136-44-3245

感動一点 の場

『老人と犬』

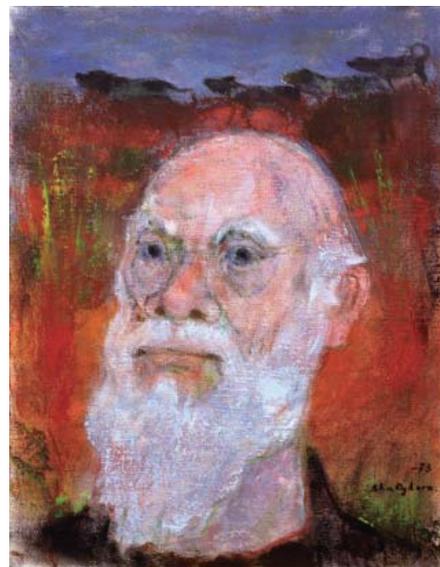
1973年 小川原 脩 画

1973年頃の小川原脩の主な作品は「群化社会」に代表されるような、無数の野犬たちが描かれていた。ところが、この作品では背後に群れとなって駆けてゆく犬たちが描かれているものの、中心は人物の肖像である。見事な白髪と髭に、大きな目鼻立ちの老人。真一文字に結ばれた口。眉を持ち上げ目を見開き何かを凝視している。赤、黄色、緑の明るい色彩が散りばめられた激しい背景とともに、大変力強い人物像となっている。

この老人像には、実在のモデルがいる。小川原自身は誰かということは語っていないが、麓彩会の画家たちは「貫太郎さんだ」という。「貫太郎さん」こと笹谷貫太郎（1901-1978）氏は、岩内で親しまれた絵描きのひとり。小川原との関連でいうと、1966年の第8回麓彩会展から10年間ほど出品を続けていた。明らかに同一人物と思われる作品は他に3点あり、いずれも「老人と犬」という題が付けられている。なぜ、小川原は笹谷氏を描いたのか、この表情は何を物語るのか。画家の鋭い眼光は老いることはなく、小川原自身の視線も重ねたかのようだ。

この作品をはじめ、小川原脩が描いた様々な顔。12/19（土）から開催の「小川原脩のまなざし＜顔＞」展で展示される。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）



ふる探訪 さと

— 肥後守（ひごのかみ） —

393回

昭和40年代まで、田舎の子どもたちは遊び道具を自作することが多かった。むしろ遊び道具を自作することが遊びになっていた。チャンバラの刀、ゴム鉄砲、パチンコ、竹とんぼ、コマなど例をあげればきりが無い。山林で探し出した木を主な材料にし、タコ糸や針金などを用いて自分で作ったのであった。

製作に使う道具と言えば「肥後守」である。今どき「肥後守」と聞いてもピンとこない方が多いかも知れないが、刃が金属のサヤの中に折りたたまれるようになっている小刀のことだ。いつも持ち歩き、モノを切ったり削ったり、皮を剥いたりするのに使った。刃先で穴も開けた。

刃物の命は切れ味である。切れ味が鈍ると、そのあたりのコンクリートの表面や河原で拾った石で砥いで使った。当時の田舎の子どもにとって刃物を砥ぐのは普通のことだった。このように肥後守を使うことを通して、大げさに言えば道具には使い方やコツ、さらには維持するための具体的な技術があることを理解し身につけていった。

忘れられない思い出がある。肥後守を使い始めたとき、何度も手を切った。ある日、二度目に手を切ったとき、なぜか痛くなかったと感じた。さらに最初の傷の痛みも消えているように感じた。そこで「手を切った時は、もう一つ傷を作れば両方の傷の痛みが消えるのだ」と考えた。そして次に手を切ったとき、出血する傷の横に新たに傷を加えたのである。さて、この経験の意味することは何だろう。失敗から学ぶということか。あるいは、単なる愚行ということか。それとも、わざわざ体験する必要のないこともある、ということだろうか。

文：岡崎 毅（倶知安風土館館長）

